

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.160
2020/12/24

目 次

理事会報告	1
日本学術会議任会員の任命問題について	3
第 36 回年次大会特別研究集会報告	4
第 26 回公開講演会報告	24
第 37 回年次大会の開催について	26
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告	29
寄贈図書	30
会員の異動	31
事務局より	31
編集後記	32

理事会報告

【2020 年度第 2 回理事会報告】

日時：2020 年 10 月 15 日（土）18:30～21:00

オンライン開催

出席者：秋葉淳、岩崎えり奈、江川ひかり、大稔哲也、勝沼聡、菊地達也、黒木英充、
近藤信彰、末近浩太、東長靖、錦田愛子、三沢伸生、森山央朗、安田慎、山岸智子、
横田貴之

委員会からの報告に先立って、大稔会長から、第 25 期日本学術会議会員の任命問題に

関して10月2日以降に行った諸々の対応について説明があった。

[報告事項]

1. AJAMES 編集について報告と説明があった。
2. 国際交流事業について、2020 年度年次大会特別研究集会への韓国中東学会からの招聘ができなかったことが報告された。
3. 広報事業について、資料に基づいて学会 HP の更新について報告があった。
4. 第36回年次大会特別研究集会の決算報告があった。また、研究集会の反省点などの意見交換がなされた。
5. 第26回公開講演会の予定について報告があった。
6. 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(GEAHSS)の加盟手続きが完了し、運営会議に出席したことについて報告があった。
7. 国際文献社への事務局業務の委託が10月1日から開始されたことが報告された。

[審議事項]

1. AJAMES 編集事業計画を承認した。また、投稿規定 10.2 および英文の投稿ガイドラインの改定を承認した。
2. 2020 年度第 19 期評議員・理事選挙の日程を承認した。
3. 第 37 回年次大会実行委員会の実行委員会、事務局の構成および実施方針を承認した。
4. 第 27 回公開講演会の開催方法について審議した。
5. 会員動向について報告があり承認した。

【2020 年度第 3 回理事会報告】

日時：2020 年 11 月 26 日（土）18:30～20:30

オンライン開催

出席者：秋葉淳、江川ひかり、大稔哲也、菊地達也、黒木英充、近藤信彰、錦田愛子、三沢伸生、森山央朗、安田慎、山岸智子、

欠席者（委任状あり）：岩崎えり奈、勝沼聡、末近浩太、東長靖、横田貴之

[報告事項]

1. 大稔会長より、日本学術会議会員の任命問題に関して、第 2 回理事会以降に行った対応について報告があった。
2. 第 26 回公開講演会についての報告があった。
3. 刊行予定のニューズレターについての報告があった。

[審議事項]

1. 広報委員会の業務について、学会ホームページ更新等の方針が承認された。
2. 2021年度の第27回公開講演会を2021年秋にオンラインで開催することを決定した。
3. 男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）による学会の男女共同参画推進活動にかんする学協会アンケートについて検討した。

日本学術会議任会員の任命問題について

第25期日本学術会議会員の任命問題に関する理事会声明

2020年10月11日

本学会は日本学術会議の協力団体の一つとして、これまで同会議をサポートしてきました。また、日本学術会議の地域研究委員会を支える「地域研究学会連絡協議会」の主要参加団体として、同会議の「提言」などにも我々の意見を反映させてきました。現在も、複数の本学会員が同会議の会員・連携会員を務めています。

今回、日本学術会議の第25期会員候補者が推薦された中で、なぜ6名だけが内閣総理大臣により任命されなかったのか、その理由は今なお(10/11現在)明確にされておられません。また、日本学術会議法や過去の国会答弁等との整合性についても、未だ十分な説明がなされていません。多様な価値観と政治見解を認めながら、真理を求めて学術に携わり、国際的な研究を推進する本学会にとっても、これは大いに憂慮される事態であり、決して看過できない問題です。

我々はここに、日本学術会議が10月2日に発出した「第25期新規会員任命に関する要望書」に記された2点、すなわち、同会議が推薦した会員候補者6名が任命から外された理由の明確な説明と、6名の速やかな任命を、政府に強く要望します。

日本中東学会理事会

「人文・社会科学系学協会共同声明」(11月6日)に参加のご報告

2020年11月12日

会員の皆様

日本中東学会は永らく日本学術会議の協力団体であり、その活動をサポートして参りました。また、複数の本学会員が同会議の会員・連携会員を務めてきました。しかしながら、今回、政府によって同会議の会員6名の任命が拒否されました。しかも、その理由は一カ月以上経った現在でも、一向に明確になっておられません。コロナ禍に苦しむ社会に不要な分断を持ち込み、日本を代表する学術アカデミーの活動を阻害し

ている現状は、決して看過できないものです。本学会理事会も10月2日以来、常にこの問題の対応に追われてきました。

本学会としては、まず10月11日付で緊急的な学会声明を理事会名で発出し、その内容を本学会のホームページに掲載しました。続いて10月15日付で、地域研究学会連絡協議会を通じて、やはり共同声明を会長名で発出しています。こちらもホームページへ掲載済です。そして、この2件の声明発出については、すでに本学会メーリングリストで、皆様にご報告した次第です。

さらに、今回は11月6日に「人文・社会科学系学協会共同声明」へ理事会名で参加いたしました。この内容も近々、本学会ホームページに掲載いたします。これらいずれも瞬時の判断を求められたため、学会名ではなく理事会名等を使用しております。

加えて現在、本学会員で日本学術会議の会員を務めてきた方々に声を掛け、本学会との関りや日本学術会議の活動内容などについて理解を深めるための企画を始めようとしております。皆様には、色々なご意見がお有りかと拝察いたしますが、日本や世界の学術発展を希求しつつ、本学会としての活動が阻害されぬよう、今後も様々な形で粘り強くこの問題に対応し続けていくつもりでおります。何卒、ご理解とご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

日本中東学会会長 大稔哲也

第36回年次大会特別研究集会報告

【プログラム】

*氏名の右側の()内は所属。Jは大学院生を指す。

*氏名の下に波線がついている発表者は、PDFファイルで発表

第1日：2020年8月29日(土) 14:20~16:30

開会挨拶 日本中東学会会長 大稔哲也(早稲田大学)

【企画セッション】

企画セッション1

「非国家主体の理論と実践—クルド人の非政府主体を事例として」

司会：辻田俊哉(大阪大学)

発表① 青山弘之(東京外国語大学)

傀儡か自治か：シリア北東部におけるクルド民族主義勢力の盛衰(2011~2019年)

発表② 吉岡明子(日本エネルギー経済研究所中東研究センター)

イラク・クルディスタン地域の国家性—未承認国家論からの検討

発表③ 今井宏平(日本貿易振興機構アジア経済研究所 IDE-JETRO)

クルディスタン労働者党(PKK)の戦略変化に関する政治学的考察

コメンテーター 佐藤章（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

企画セッション2

「ダイグロシアとアラビア語教育」

司会：榮谷温子（慶應義塾大学）

発表 ① 榮谷温子（慶應義塾大学）

正則アラビア語とエジプト方言の対照分析

発表 ② 近藤久美子（大阪大学）

ブルネイ・ダルサラーム国におけるアラビア語教育

発表 ③ モハンマド・ファトヒー（東京外国語大学）

“話されるフスハー”の特性とその教授実践例

発表 ④ 岡崎英樹（四天王寺大学）

統合アプローチ（Integrated Approach）に取り入れるべき口語変種について

企画セッション3

「企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」に対する一般来場者の反応について」

発表 ① 西尾哲夫（国立民族学博物館）

黒田賢治（国立民族学博物館）

フォーラム型情報ミュージアムとしての展示の可能性について

発表 ② 竹田多麻子（横浜ユーラシア文化館）

一般来場者にとってのサウジアラビア：展示アンケート結果から

発表 ③ 藤本悠子（片倉もと子記念沙漠文化財団）

『みられる私』より『みる私』をどう具体化できたか：片倉もとこフィールド資料を活かした博物館展示

発表 ④ 縄田浩志（秋田大学）

アラブ流もてなし文化の体験イベントの試み

コメンテーター：寺田鮎美（東京大学）

第2日：2020年8月30日（日）9:30~16:00

【個人研究発表】

第1部会 MR1-2

高橋稜央（北海道大学・院J）後ウマイヤ朝期アンダルス社会とキリスト教徒をめぐる法学議論

早矢仕悠太（東京大学・院J）中世アンダルスのマーリク派法学における死地蘇生規定の受容

沖祐太郎（九州大学）19世紀末のアラビア語国際法テキストにおける「戦争」観念の思想的検討

小野仁美 (東京大学) 21 世紀におけるマカーシド・シャリーア理論の展開

第1部会 MR1-3

大瀧久志 (東京大学・院 J) ザイヌッディーン・カッシー (1228 年以前歿) 著『門徒への贈りもの』の予備的研究

竹村和朗 (高千穂大学) 生前贈与の意味と意義：現代エジプトの事例から考える

真殿琴子 (京都大学・院 J) オスマン朝下スーフィズム思想における「存在の円」

相樂悠太 (東京大学大学院人文社会系研究科研究員) イブン・アラビー修行論における「心」(qalb) の概念

村上武則 (京都大学・院 J) アルメニア文字クルド語新約聖書の研究

第2部会 MR2-2

Mita, Kaori 三田香織 (Chuo University) Rise of Populism in Kuwait: Observation of Kuwaiti Democracy

Goto, Manami 後藤真実 (Tokyo University of Foreign Studies) Dress to Express or Dress to Impress: Adaptation of National Dress amongst Migrants in the Gulf

Abbas Zaher, Doaa (Temple University) Women's Empowerment in Saudi Arabia

Iyas Salim Abu hajjar (Doshisha University) Second Chance Education and the Empowerment of Women: Voices from Palestinian Women in the West Bank and Gaza

第2部会 MR2-3

Rehab Abu hajjar (Ritsumeikan University) The Principle of Autonomy in Biomedical Ethics: An Islamic Perspective

Morrison, Scott (Oxford Brookes University) Some Characteristics of Money in English and Islamic Law

Matsuda, Kazuto 松田和人 (Edinburgh University) The Impact of Oil and Natural Gas on the Interstate Relations and Domestic Politics of the Gulf since 1973

Mallet, Alex (Waseda University) Christians, Turks, and the First Crusade

第3部会 MR3-2

ターリク・フセイン, ハカミー (東海大学・院 J) 日本語とアラビア語における謝罪意識の比較：謝罪をする側の意識に焦点を当てて

鷺見朗子 (京都ノートルダム女子大学)、鷺見克典 (名古屋工業大学) アラビア語学習者における基本的心理欲求の充足が学習結果に及ぼす効果：自己決定理論に基づく検証

榮谷温子 (慶応義塾大学) アラビア語エジプト方言の疑問詞 —日本語との対照分析—
アルモーメン, アブドーラ (東海大学) ア日通訳に於ける訳出上の課題：報道通訳に於ける明示化の攻略法をめぐって

第3部会 MR3-3

木下実紀 (大阪大学・院 J) 19世紀末イラン翻案作品にみられる言説

岡 真理 (京都大学) 「帰還」小説 — エグザイル、ホーム/ランド、そして父と息子の物語

濱田聖子 (東京大学) ジャーヒズ著『けちんぼども』に描かれる文人たち

竹田敏之 (京都大学) アラブ・イスラーム文化における「千行詩」の伝統と現代性：
イブン・マーリク以降のアラビア語文法学を中心に

モハンマド, ファトヒー Mohamed Fathy (東京外国語大学 Tokyo University of Foreign Studies)

正しいアラビア語とは：アラビア語を対象とする研究の課題について

第4部会 MR4-2

望月 葵 (京都大学・院 J) シリア難民危機以降のヨーロッパ：難民の帰属と社会包摂

岡崎弘樹 (日本学術振興会) 現代シリアにおける世俗主義と権威主義国家の同盟関係

早川英明 (東京大学・院 J) 「宗派主義」は「宗派」に何を期待するか

岡部友樹 (京都大学・院 J) 紛争後の抗議運動：レバノンにおける『10月17日革命』を事例に

第4部会 MR4-3

松原康介 (筑波大学) 20世紀後半におけるオールド・ダマスクスの都市計画思想

田村うらら (金沢大学) トルコ共和国における「遊牧民」ユルックの公共化：文化祭典の分析から

モハッラミプール, ザヘラ (東京大学・院 J) 黒板勝美のペルシア旅行と東洋観

第5部会 MR5-2

永島 育 (早稲田大学) エディルネ機動師団：オスマン陸軍による不正規戦争遂行の一例として (1903-1904)

岩元恕文 (九州大学・院 J) トルコ共和国初期におけるユダヤ人と国民国家：「市民よ、トルコ語話そう」運動前後におけるアヴラム・ガランティとテキンアルプの活動

今城尚彦 (東京外国語大学・院) 「アレヴィーらしさ」の社会的脈絡：トルコ都市部の若者における自己規定とその葛藤

幸加木文 (千葉大学) トルコ人女性のスカーフ着用をめぐる宗教意識の諸相：宗教保守化と再世俗化の狭間で

第5部会 MR5-3

黒田賢治 (人間文化研究機構) 現代イランにおける記憶の歴史化と忘却の政治：ある帰還志願兵を中心に

梶山卓哉（龍谷大学・院 J）イラン・イスラーム共和国憲法草案の比較
今井真士（学習院大学）権威主義体制下における二院制の多様性：エジプトの 2019 年
憲法改正における元老院の開設とその理論的意義
小林 周（日本エネルギー経済研究所 中東研究センター）分断と統合の狭間で：リビ
ア国民の政治意識分析
千坂知世（大阪大学・院 J）イラン国会選挙における資格審査の実態調査(1980-2012)

第 6 部会 MR6-2

渡部敬子（大阪府立大学・院 J）社説は、いかにパレスチナに於ける「ユダヤ人国家」
樹立を促進したか—1936 年 4 月 17 日のパレスチナポストとジューイッシュク
ロニクルの批判的ディスコース分析
金城美幸（立命館大学）被占領地のパレスチナ難民にとって「帰還」とは：リフター
村の事例より
児玉恵美（東京外国語大学・院 J）レバノンにおけるパレスチナ解放運動と殉教概念
鈴木啓之（東京大学）イスラエル占領政策の蹉跌：第四次中東戦争後の変遷を軸に

第 6 部会 MR6-3

今野泰三（中京大学）宗教とネーションの創造：宗教的シオニズムと文化的シオニズ
ムの Judaism を巡る議論
戸澤典子（東京大学・院 J）ヨルダン川西岸地区のアメリカ系ユダヤ人入植者：2000 年
以降の移民定住を事例として
池端蒔子（日本学術振興会）『君主と学者の同盟』の現代版か？ ヨルダン、ガーズィー
王子の思想と活動
保井啓志（東京大学・院 J）フェミニズムから見たシオニズムの一考察
へバタッター、オマル（名古屋大学・院 J）FGM オリエンタリズムとダブルスタンダー
ド：エジプトを中心に

第 7 部会 MR7-2

白杵 悠（一橋大学・院 J）ヨルダンにおける女性の労働市場参加と就業状況：2008 年・
2010 年世帯調査から
ハシャン、アンマール（立命館大学）イスラーム仮想通貨はどこまで可能か？その是
非をめぐる 3 つの争点と法学的経済論の視座
足立真理（京都大学）現代インドネシアにおけるザカート制度化の沿革：準市場化に
向けた競合・協働事例の検討
桐原 翠（日本学術振興会）ハラール認証制度における認証規準：イスラーム法規定と
マレーシアの行政規則

第 7 部会 MR7-3

清水 学（アジア経済研究所名誉研究員）インド BJP 政権の対中東・ムスリム認識

小山 友 (千葉大学・院 J) 移民送出国との関係性から検証する現代オランダにおけるトルコ系移民の政治：近隣西欧諸国との比較の視座から
青木健太 (中東調査会) アフガニスタン現代政治の構造と様態：現体制における権力の配置とその含意

第8部会 MR8-2

棚橋由賀里 (京都大学・院 J) ムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリーのイスラーム思想：15世紀モロッコにおける神理解と民衆教導
関佳奈子 (上智大学) 20世紀初頭のコート・ダヴール北部における諸部族の動向：リーフ戦争再考のための一考察
山口匠 (東京大学・院 J) デジタル・アーカイヴ化される文化的多様性：現代モロッコにおける公共文化への挑戦
池北眞帆 (東京大学・院 J) スペイン極右勢力 VOX の反イスラーム言説の論理と新展開

第8部会 MR8-3

渡部良子 (東京大学) 前近代イランにおける聖者廟の財産管理：サファヴィー朝期におけるシャイフ・サフィー廟の不動産運営を通して
後藤敦子 (お茶の水女子大学) セルジューク朝におけるワズィール職の一側面：ダルガズィーニー家を中心に
※成地草太 (明治大学・院 J) 地方住民とチェルケス難民との衝突：オスマン帝国東部国境地域バトゥミ郡の事例から ※発表取り下げ
岩田和馬 (東京外国語大学・院 J) 18世紀イスタンブールの場の利用権をめぐる争い

【研究発表会場から】

企画セッション1「非国家主体の理論と実践—クルド人の非政府主体を事例として—」

本企画セッションは、政治学および国際関係論の視点からクルド問題について考察することを目指した。冒頭に企画者の今井宏平会員 (アジア経済研究所) から日本のクルド研究の動向と本企画の位置づけが述べられた後、以下の3つの報告が行われた。

青山弘之会員 (東京外国語大学) の報告では、2011年以降のシリア内戦において、シリア北東部におけるクルド民族主義勢力の自治が拡大または縮小した過程が考察された。自治が拡大・縮小した要因として、物理的暴力と外国の支援があげられ、特に米国の物理的暴力への依存の中で自治が拡大した過程が明らかにされた。

吉岡明子会員 (日本エネルギー経済研究所) の報告では、イラク北部の自治区であるイラク・クルディスタン地域に関して、自治を強化する動きと独立に向けた動きとの関係性が解明された。未承認国家という枠組みに基づいて同地域の国家性が分析された結果、パトロン不在という要因により、未承認国家よりも現状の自治強化が追求される可能性の方が高いことが示された。

今井会員の報告では、トルコ政府とクルディスタン労働者党 (PKK) の抗争について、一般市民との関係が着目され、1990年代中頃に PKK が「穏健化」した過程が取

り上げられた。4つの仮説が検討された結果、既存の戦略の行き詰まりとヨーロッパのクルド人のディアスポラとの連携が「穏健化」の誘因であると結論付けられた。

コメンテータの佐藤章氏（アジア経済研究所）からは、サハラ以南アフリカ政治の研究知見から、不十分な国家性をどう捉えるかという問題が提起され、非国家主体によるガバナンスと公共財の提供に着目する必要性が提案された。精緻な分析が行われた3つの報告と他地域の事例から得られる示唆と課題が共有されたことで、今後の研究の発展可能性が大いに感じられた。また、本オンラインセッションには多くの会員が参加され、クルド問題に関する関心の高さが伺えた。（辻田俊哉）

企画セッション2「ダイグロシヤとアラビア語教育」

企画セッション『ダイグロシヤとアラビア語教育』の第1報告、榮谷温子の「正則アラビア語とエジプト方言の対照分析」は、特に新情報はなかったが、正則語と口語を簡単に対照し、その類似や相違をいくつか示した。

第2報告、近藤久美子会員による「ブルネイ・ダルサラーム国におけるアラビア語教育」は、ダイグロシヤの真逆を行く、ブルネイのスルタン・シャリーフ・アリー・イスラーム大学(UNISSA)の正則語教育を紹介した。

第3報告、モハンマド・ファトヒー会員による「“話されるフスハー”の特性とその教授実践例」では、「話されるフスハー」という、正則語と口語との中間的な言語についてその特徴が述べられた。また「話されるフスハー」の教材の紹介と問題点の指摘がなされ、最後に、発表者自身が外務省の研修用に作成した「話されるフスハー」（エジプト方言やレバント方言を取り込んだもの）の教材が紹介された。

第4報告は、岡崎英樹会員による「統合アプローチ(Integrated Approach)に取り入れるべき口語変種について」では、学習初期の段階から口語と正則語とを「単一の授業内で」「相補的に」導入し、4技能の習得を目指す教授法のひとつ、統合アプローチに関する発表。Educated Spoken Arabic（上記の「話されるフスハー」に該当）の、成文化された文法がなく不安定である等の問題点、また統合アプローチにおいてどの口語変種を取り入れるべきかの問題などが論じられた。

質疑応答においては、正則語と口語の橋渡しのEducated Spoken Arabicについて、確かに人工的であり、authenticな側面のない言語であるが、インターネットが発達し、ネイティブ・スピーカーとの会話やチャット等の機会が簡単に得られる現代においては、外国人の話すアラビア語として必要ではないかという意見が出されるなどした。

（榮谷温子）

企画セッション3「企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」に対する一般来場者の反応について」

本セッションは、企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」（2019年6月6日～9月10日に国立民族学博物館にて、2019年10月5日～12月22日に横浜ユーラシア文化館にて開催）の概要、展示目的・趣旨といった学術的意義についての概説を踏まえて、企画展内容とその関連イベントに対する一般来館者アン

ケート、ブログ、ツイッター等といった反応を紹介することにより、イスラーム、中東、女性に関して、どのような理解が日本社会で醸成されえたのか、本展示の社会的意義について議論した。研究者・専門家による地域に根ざした研究の成果は、どのように一般社会にアウトリーチすることができているのかについて、①研究者・展示担当者のもくろみは何であったか？（縄田浩志）、②データベース、コレクション、アーカイブは何を目指すか？（西尾哲夫・黒田賢治）、アンケートに基づき何をどのようにして把握できたか？（竹田多麻子）、④コンセプトはどのようにしてどの程度受けとめられたか？（藤本悠子）、⑤イベントを通じて一般社会・来場者との間で何が生み出されたのか？（縄田浩志）という5つの側面に関する発表があった。コメンテーターとして文化政策・博物館評価が専門の寺田鮎美は、研究者が一般の人に関心を向けることの意義、展示の達成度を把握しようという試みの価値、そしてその結果を研究者同士で共有することの重要性についてコメントをした。また、新型コロナ・ウィルス禍という状況下での博物館の新たな方法や役割を模索している現況について、発表者・コメンテーター・参加者間で意見が交わされた。日本での展示の成果を踏まえて、今後中東現地社会へと研究成果を還元しようとする際の課題についての議論も進んだ。（縄田浩志）

第1部会 MR1-2

午前の部の発表は、最初の2つは前近代のイベリア半島、他の2つは近現代に関するいずれも法学的な内容であった。まず、高橋稜央会員（北海道大学・院）が「後ウマイヤ朝期アンダルス社会とキリスト教徒をめぐる法学議論」を報告した。この報告は、ムスリムとキリスト教徒の関係を両者の混合婚における子の監護権に関するマリーク派の学説とその適用事例から明らかにする試みであり、先行研究とは逆に同派の法学がこの問題については2つの宗教を等しく扱おうとする傾向を指摘した。

第2報告は、早矢仕悠太会員（東京大学・院）の「中世アンダルスのマリーク派法学における死地蘇生規定の受容」である。この報告では、イスラーム法の死地蘇生制度と先行研究の外観後、アンダルスのマリーク派の確立期である11-12世紀に焦点を当て、同制度が公共用地との関連性において、またシャーフイー派の学説的影響も受けつつ構築されてきたことの論証を試みた。

第3報告は、沖祐太郎会員（九州大学）の「19世紀末のアラビア語国際法テキストにおける「戦争」観念の思想的検討」である。この報告は、近代国際法に関する最初期のアラビア語書籍3つを取り上げ、それぞれの典拠とその援用のされ方、特に正戦論に関する主張に着目し、これらの書籍がいずれもヨーロッパの国際法学における少数説を代弁していることを明らかにした。

第4報告は、小野仁美会員（東京大学）の「21世紀におけるマカーシド・シャリーア理論の展開」である。この報告は、イスラーム法学の「法の目的」理論の現代的展開の一例として、チュニジアのイスラーム改革思想家イブン・アーシュール（1973年没）の著作を取り上げ、近年におけるその影響の原因として著述の明快さや英訳の普及のほか、一般に保守的とされる彼の立場に再考の余地がある可能性を指摘した。

いずれの報告にも 25~30 名程度が参加し、活発な質問やコメントが寄せられた。
(堀井聡江)

第1部会 MR1-3

第1発表の大淵久志氏は、ザイヌッディーン・カッシーの著作『門徒への贈りもの』を取り上げ、これが彼の代表作『真理の庭園』以前に執筆されたことや、彼がアシュアリー学派に属する師匠のファフルッディーン・ラーズィーと異なり、思想的にハナフィー学派（マートゥリーディー学派）に属していたことなどを示した。質疑では、師弟の学派が異なることの意味などについての質問があがった。

第2発表の竹村和朗氏は、エジプトで行ったフィールドワークをもとに、夫が妻に自宅の土地の生前贈与を行っていた事例を紹介し、これをイスラーム法に基づいた相続法に対して配偶者の経済的権利を守るための現代的対応と位置付けた。その後の質疑では、生前贈与についての税金の問題や家族内での話し合いの有無などが質問に上った。

第3発表の真殿琴子氏は、17世紀オスマン朝下のスーフィー、ニヤズィー・ムスリーの著作から、スーフィズム思想における「円環」および「存在の円」の概念について考察した。質疑では、アラビア語の用語の解釈をめぐる専門的な議論が展開された。

第4発表は PDF 発表となった。発表者の相樂悠太氏は、イブン・アラビーが「心 (qulb)」という用語を修行論の中でどのように用いているか分析した。

第5発表の村上武則氏は、1872年にアメリカの宣教団体 ABCFM がイスタンブルで出版した、アルメニア文字クルド語の新約聖書を取り上げ、その表記方法や言語的特徴、訳語の選択などについて論じた。

セッションを通じ、各発表には 10~30 名の聴衆が集まり、活発な質疑が行われた。
(五十嵐大介)

第2部会 MR2-2

三田会員は、クウェートの特徴的な民主化と近年興隆しているポピュリズムについて報告した。1人あたり4票投ずることができた従来の選挙法を1人1票に変更したために、ポピュリスト勢力に票が集中してしまうことや、社会的流動性の欠如がポピュリズムの興隆要因として挙げられたほか、こうしたポピュリズムの興隆が政府のガバナンス低下を招くことが指摘された。後藤会員は、UAE およびオマーンにおけるイラン系移民の衣装について、フィールドワークをもとに、国民/民族双方のアイデンティティの側面から報告した。アラブ・ベドウィン文化が国民文化を代表する傾向にある湾岸アラブ諸国において、社会文化的環境に応じて衣装を選択する少数派イラン系移民、とりわけ女性の個人あるいは民族的アイデンティティの多様性が浮き彫りになった発表であった。サウジアラビアにおける女性のエンパワーメント政策について報告した Doaa Zaher 会員は、サウジ社会を保守的ゆえに変革が困難であるとしつつも、ムハンマド皇太子主導の政策が、いかに従来の文化的・宗教的価値体系を崩壊させるこ

となく社会を改革しようとするものであるかを報告した。女性に対する抑圧や遅々として進まない改革に対する国際的批判がある一方で、皇太子の戦略的改革はもっと高く評価されるべきだとしている。Iyas Salim 会員は、パレスチナ女性のセカンド・チャンス教育について、ガザとヨルダン川西岸でのフィールドワークをもとに報告した。家庭との両立、紛争による不安定な日常や数多の不正に向きあいながら、教育に意義を見だし、紛争により失われた教育機会を回復しようと奮闘する女性たちがいる一方で、早婚によって教育を断念せざるをえないという現実もあきらかになった。第2部会では中東「ネイティブ」研究者を含んだ英語セッションで、発表や議論双方で内部の生の声が飛び交うなど、活発な議論がおこなわれた。(大川真由子)

第2部会 MR2-3

MR2-3の第一報告では、現代の生命倫理をめぐる諸問題がイスラーム社会でどのように扱われているかを紹介した。近年、医学をめぐる社会の認識の変化と、生命科学技術の発展によって、生命倫理に関する課題が続出している。インフォームド・コンセントしかり、安楽死しかり、IPS細胞の利用しかり。報告者 Rehab Abu-Hajjar (Al-abadela) は、こうした世界共通の課題にイスラーム社会がどのように取り組んでいるかを概観した。

第二報告は、イスラーム法における利子の扱いについて取り上げ、英国法の場合と比較した。イスラーム法ではリバーが禁じられている。しかし本報告によると、それは利子そのものを問題にしているのではなく、利子をめぐって人間が不完全な判断をしてしまうことを懸念しているのだという。不確実な未来について人間が誤った判断を下してしまうことを法体系に組み入れているという点で、イスラーム法の方が英国法よりも人間の心理を捉えている、と報告者 Scott Morrison は論じた。

第三報告は、現代の湾岸諸国に焦点を当て、化石燃料をめぐる諸問題が湾岸諸国の政治と国際関係にどのように影響を与えるかを検討した。石油や天然ガスが湾岸諸国に深い影響を与えていることは言うまでもないが、そのメカニズムを理論的に捉えようというのが本報告である。報告者 Kazuto Matsuda (松田和人) は、国内政治、国際的な紛争、国際協力の三つの要素に注目し、その三つで構成される三角関係と化石燃料の関係を分析した。

第四報告では、第一回十字軍派遣の原因を追及した。11世紀末以降、十字軍がエルサレムに向けて派遣された。本報告によると、この原因は、セルジューク朝が西アジア地域に圧力をかけたことにあると古典的には理解されていた。しかしこうした歴史理解は、20世紀中葉以降は大幅に修正され、西アジアではなくむしろヨーロッパ内の社会変化が十字軍派遣の本質的な原因であったという議論が優勢になってきた。本報告は、こうした近年の歴史叙述に再検討を迫る。すなわち、当時の西アジアの状況を長期的・広域的に分析すると、セルジューク朝がキリスト教徒に深刻な圧力をかけていたことは間違いがなく、それが十字軍派遣の主要な要因であったのだと報告者 Alex Mallett は論じる。この報告に対しては参加者から反響が大きく、活発な質疑応答が行われた。(佐藤尚平)

第3部会 MR3-2

ハカミー会員（東海大学・院）はPDFによる発表で、日本人とアラブ人（国名・性別・年齢等の記述なし）各115名へのアンケート調査をもとに、両者の謝罪意識を比較した。自らの行為に対する罪悪感・相手に迷惑をかけたという意識が日本人はアラブ人よりかなり高かった一方、相手の許容を期待する度合いはその逆であった点が対照的で、興味深く感じられた。また、総じてアラブ人は謝罪よりも説明意識を強くもつ点が強調された。

鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）・鷺見克典（名古屋工業大学）両会員は、日本の大学でアラビア語を学ぶ学生298名を対象に質問紙による調査を行い、学習者の充足に対する支援と実際の欲求充足の関係を共分散構造分析によって検討した。その結果、予想どおり、4週間後の時点で前者が後者にポジティブな影響を及ぼしていたことが確認された。発表者自身が述べた時間間隔の再検討や、質疑応答でも出たアラビア語教育への具体的活用などが今後の課題であろう。

榮谷温子会員（慶応義塾大学）の発表は、アラビア語エジプト方言と日本語の疑問詞を取り上げた対照研究だった。質疑応答では、フスハー（文語）や他の口語（方言）との比較も加え、アラビア語母語話者を交えての議論が活発になされた。アラビア語疑問詞の用法には日本の学習者が間違えやすい点もあるが、これまで本格的な対照研究はなかった（ように思われる）。こうした研究が今後、日本のアラビア語教育に活かされることを期待したい。

アルモーメン会員（東海大学）のPDF発表は、アラビア語から日本語への放送通訳、とくに「明示化」（暗黙の前提を共有しない受け手の理解度を高めるため、原文にない要素を訳文に付加したりすること）に関するもので、実際にこの分野で活動する放送通訳者へのアンケート調査をもとに、日ア放送通訳においてどのような明示化戦略がとられているかを分析した。

以上のように、本部会の発表は、すべて言語（および言語関連の行動）に関するもので、より詳しく言えば、アラビア語と日本語、双方を対象とする応用言語学的研究・対照研究であった。両言語間のコミュニケーションは年々深化しており、相手言語の学習者・使用者も増えている。本部会もアラビア語話者と日本語話者の発表が半分ずつで、バランスがとれていた。言語教育や翻訳（通訳）等の充実のために本分野の研究は重要であり、（今回二つの発表がPDF発表なのはやや残念だったが）日ア双方の研究者が集まって議論する場は貴重だと実感された。（福田義昭）

第3部会 MR3-3

文学と言語学の発表を集めた第3部会午後の部は、イラン近代文学・アラブ現代文学・アラブ古典文学・アラビア語古典文法学・現代アラビア語学と多彩な領域を涉猟し、活発な質疑を繰り広げる場となった。

木下実紀（大阪大学J）「19世紀末イラン翻案作品にみられる言説」はアラブ・トルコにやや遅れる形で西欧文学の翻訳活動を活発化させた近代イラン文学から『72派の

宗教談義』を紹介する。日本の事例とも比較可能な興味深いテーマであり、今後の発展に期待したい。岡真理（京都大学）「「帰還」小説—エグザイル、ホーム/ランド、そして父と息子の物語」は、リビア人英語作家ヒシャーム・マタルの『帰還：父と息子を分かち国』とクウェート人アラビア語作家サ우드・アル＝サヌーシーの『竹の稗』を「祖国」への息子の帰還と父親との関係から読み解く。濱田聖子（東京大学）「ジャーヒズ著『けちんぼども』に描かれる文人たち」は残念ながら PDF 発表となったが、発表者が長年研究してきたジャーヒズに関する精緻な報告を、要点を押さえやすいように工夫された原稿で読むことができた。竹田敏之（京都大学）「アラブ・イスラーム文化における「千行詩」の伝統と現代性：イブン・マールク以降のアラビア語文法学を中心に」はモータニアでのフィールドワークに基づき、古典文法学の現代における継承と教育実践について動画も交えて紹介する。モハンマド・ファトヒー（東京外国語大学）「正しいアラビア語とは：アラビア語を対象とする研究の課題について」はネイティブにとっても必ずしも判然としないフスハーの「正しさ」の境界について具体的な表現例とともに論じ、広くアラビア語学習者の関心を引いた。（鵜戸聡）

第4部会 MR4-2

望月葵会員は、西欧の代表的な難民受入国たるドイツとスウェーデンを取り上げ、両国の難民政策一般を比較検討した後、ベルリンとストックホルムでの臨地調査に基づいてシリア難民の包摂の実態を明らかにした。アラビア語やイスラームといった文化的帰属要素が両社会の公共空間にて難民の居場所を与え、難民の起業がその枠組みを積極的に利用して両社会に働きかけていることが指摘され、質疑でも議論された。

岡崎弘樹会員は、1967年第3次中東戦争敗北後のシリアにおける世俗主義の代表的思想家サーディク・アズムのイスラーム宗教思想批判の言説を紹介したうえで、（一般に世俗主義思想家と位置付けられる）ヤスィーン・ハーッジ・サーレハとブルハーン・ガリユーンの、権威主義体制との関係においてアズムを批判する議論を紹介した。質疑応答は2011年以降のエジプトのムスリム同胞団と左翼リベラルの関係などをめぐってなされた。

早川英明会員は、現代中東政治にて多用される「宗派主義」をめぐり、そこには人々が「宗派に対する期待」が存在するはずだとの仮説を立て、イラクにおける「許容できる/できない宗派主義」と公的・私的領域の関連や、エジプトのコプト問題と世俗主義の関係、レバノンの階級と宗派主義の議論を検討した。質疑では、地域的な宗派主義の背景の違いを比較研究でいかに評価するか、公私の領域設定に権力が関与する中での宗派主義の位置づけをめぐってなされた。

岡部友樹会員（PDF 報告）は、昨年10月からレバノンで激化した人々の抗議運動を、イラク、スーダン、アルジェリアにおける同様の運動との同時性に注目し、いずれも過去に内戦を経験した国であり、いずれも抗議運動の非暴力性という共通点があることを指摘した。そのうえで現地において抗議運動を観察した経験を踏まえつつ、内戦を経験した社会における人々の政治行動をめぐる先行研究を渉猟し、レバノンについて今後の研究見通しを提示した。（黒木英充）

第4部会 MR4-3

第4部会午後の部MR4-3では、最初に松原康介会員（筑波大学）からオールド・ダマスクスの都市計画思想についての発表があった。世界遺産運動を主導するユネスコによって批判されたM.エコシャールと番匠谷堯二らの1968年策定のダマスクス旧市街の都市計画の内容を精査し、特にその都市計画思想について、ヘレニズム遺構への関心やその方法論としての「デガジュマン」の解釈について検討が加えられた。発表後、都市計画と観光との関わりや、建築思想史における「デガジュマン」の概念について、質疑応答があった。次に田村うらら会員（金沢大学）が、近年、トルコで活発に開催されているユルックの文化祭典の人類学調査を踏まえ、ユルック文化が「遅れた粗野な」ものから「誇るべきトルコの基底文化」へと変貌する過程について考察した発表を行った。特に現代ユルックの多層性やユルック協会の包括性、ユルック・オスマン帝国・トルコ共和国の歴史的連続性からユルックの公共化を論じた。発表後、歴史的には当該行事の祭典化にはアブデュルハミト2世による対ユルック政策があったことや祭典の地域差についてのコメントや質疑があり、意見交換がなされた。最後にモハッラミプール・ザヘラ会員（東京大学）による黒板勝美のペルシア旅行と東洋観についての発表があった。日本人の歴史学者として初めてペルシアを訪れた黒板勝美のペルシア旅行の目的と概要を日本側とペルシア側の資料を駆使し紹介した後、帰国後、黒板の古美術品蒐集の（財）啓明会創立十周年記念展覧会への出品やまた黒板が参加した東京帝室博物館の復興事業の関連資料から、「東洋」の範囲や「東洋」観についての検討がなされた。発表後、黒板が蒐集した古美術品の現状や日本における「東洋観」が定まる歴史的時期についての質疑やコメントがあった。いずれの研究発表も多くの資料収集と精緻な分析、また新しい論点を含むもので、質疑やコメントについて活発な議論が交わされたことは実に有意義であった。（鷹木恵子）

第5部会 MR5-2

MR5-2では4つの口頭報告がなされ、参加者は全体を通じて23人～40人の間で推移した。報告要旨は要旨集にある通りなので、以下、質疑内容を簡潔に記す。永島報告に対しては、1903年の不正規戦争がオスマン陸軍の組織編制が与えた影響や、本研究が依拠する資料から当時のオスマン内政の変化、より具体的には統一と進歩委員会の台頭に関わる政治情勢の様子が読み取れるかとの質問があり、前者については予備兵のあり方が検討され始めたこと、後者については質問内容を肯定する回答があった。岩元報告に対しては、研究対象の思想家について、トルコ語と文字の結びつきや文字改革をどうとらえたか、母語と著作言語、トルコ語普及の方法をどう考えていたか、との質問があった。回答として、文字改革に反対したと言える証拠はないが、ラテン文字には否定的であったことや、母語はユダヤ・スペイン語だが、著作はトルコ語かフランス語が中心だったが、この研究に関わる著作はトルコ人向けにトルコ語で書かれているとの回答があった。今城報告に対しては、調査地や超対象団体の情報や、報告にあったようなアレヴィ内の多様性がアレヴィ復興以前にも常に存在した可能性、

アレヴィにとっての宗教の定義について質問があり、回答としてアレヴィの多様性を研究として同定することの重要性が確認された。幸加木報告に対しては、タリーカへの参加者はリーダーに倣う姿勢が一般的なので、リーダーがスカーフを外せば自分も外す、という事例もあり、宗教に熱心になることがスカーフ着用と即結びつかない可能性や、文責対象のウェブサイトの運営者の背景やトルコでの認知度、どのような人がアクセスしているのか、といった質問が出され、スカーフ着脱の多様な意味合いをさらに深く考える必要性や、ネット上の情報を分析する上での問題や困難さが議論された。(澤江史子)

第5部会 M5-3

本セッション (MR5-3) は、現代中東政治に関する発表5本で構成された (リアルタイム4本、PDF1本)。黒田賢治会員の「現代イランにおける記憶の歴史化と忘却の政治：ある帰還志願兵を中心に」は、イラン・イラク戦争の歴史化について現地調査結果から考察するものであった。国家による同戦争の歴史化と並行する形で、個人の記憶が人為的に忘却される可能性は非常に興味深い指摘であった。梶山卓哉会員は「イラン・イスラーム共和国憲法草案の比較」において、イラン革命直後の1979年6月に公表された新憲法草案と同年に国民投票にかけられた新憲法最終草案の比較分析を行い、各々が目指す政治体制を分析した。また、起草作業でイスラーム法学者の影響力が徐々に強まる経緯が明らかになった。今井真士会員の「権威主義体制下における二院制の多様性：エジプトの2019年憲法改正における元老院の開設とその理論的意義」は、スイースイー政権下で新設された元老院 (上院) を事例に、二院制の制度設計の多様性を明らかにした。エジプト政治研究として同国の権威主義体制の実態を解明するものであり、比較政治研究としても上院に関する研究空白を埋める意義あるものであった。小林周会員の「分断と統合の狭間で：リビア国民の政治意識分析」は、2019年11月に同氏が行った世論調査に基づく発表である。内戦下における政治意識調査は貴重であり、「地域主義」や「部族主義」などの通説を覆す調査結果は非常に刺激的であった。千坂知世会員は「イラン国会選挙における資格審査の実態調査(1980-2012)」において、第2期 (1984年) から第11期 (2020年) の計10回の国会選挙における事前立候補資格審査結果を分析した。監督者評議会は改革派の取り込みを一時図ったが、2004年 (第6期) 以降は改革派の排除へ移行した過程が明らかになった。今回はオンラインでの発表という初の試みだったが、いずれも対面発表に勝るとも劣らぬ研究であった。(横田貴之)

第6部会 M6-2

渡部敬子会員 (大阪府立大学・院) の報告は、英国委任統治領パレスチナで発行されていた二つの英字新聞「パレスチナポスト」と「ジャーイッシュクロニクル」の社説を、批判的ディスコース分析の観点から比較検討したものである。これまであまりパレスチナ/イスラエル研究では注目されてこなかった、批判的ディスコース分析という研究手法を用いることで、両紙のユダヤ人国家樹立の是非をめぐるアプローチや、

対英関係の違いなどが明らかにされた。質疑では、史料の所在形態や、当時の時代的背景との関係などについて質問が出され、分析により奥行きを持たせるための工夫が提案された。

金城美幸会員（立命館大学）の報告は、イスラエル建国時に占領下におかれたリフター村出身のパレスチナ難民にとって、故郷への「帰還」は何を意味するのか、村落史および村民たちの実践から分析した内容であった。リフター村出身者により形成された村民協会は5つ存在し、それぞれが村民の記憶などに基づき村落史を刊行している。そこでは村の重層的な歴史について記録され、「村にとどまり続け」、また破壊された村を訪問することで、記憶の世代間継承が図られている。質疑では、村の地理的範囲の認識が人によって異なることについて、現在の地図にはない古い地名の認識をたどる必要があると指摘された。

児玉恵美会員（東京外国語大学・院）の報告は、レバノンを拠点としたパレスチナ解放運動において、死者がどのように想起され、運動の記憶が継承されているのか、資料分析と聞き取り調査の記録に基づき明らかにした内容であった。「アラブ・パレスチナ資料集」に所収されたゲリラ諸組織が発する演説では、血のイメージが故郷と難民とを架橋する役割を果たした。また政治活動に積極的な現在の若い世代にとっては、殉教者墓地に埋葬された人々の存在が、解放運動を集合的に想起するためのモニュメントとしての役割を果たすことが提示された。質疑では「殉教者」という訳の適否等について指摘がなされた。（錦田愛子）

第6部会 MR6-3

第6部会（MR6-3）の第一報告者、今野泰三は「宗教的シオニズムの構造的基盤」において、宗教的シオニズムの内実は多元的性格のもと、多様なアクターや歴史・政治的的局面において相対的、状況対応的に現在の姿に展開してきたという視点を打ち出した。戸澤典子による「ヨルダン川西岸のアメリカ系ユダヤ人入植者」では、2000年以降の移民定住者の実態に迫り、集合的表象からは見えない人間の生活としての入植地の現実を提示した。池端露子は『『君主と学者の同盟』の現代版か？ヨルダン、ガーズィー王子の思想と活動』で、ガーズィー王子の著作に基づき彼独自の思想的・政治的傾向を明らかにした。保井浩志の「フェミニズムから見たシオニズムの一考察」ではユダヤ人男性の身体像の改変が政治言説の展開と補完関係のもとに進められてきたことが指摘された。ヘバッター・オマルは「FGM オリエンタリズムとダブルスタンダード」とする報告の中で、FGM 問題に埋め込まれた西洋中心主義を批判した。いずれの報告も、具体的な事例分析に基づき既存の学術的枠組に迫る意欲的なものであった。（鳥山純子）

第7部会 MR7-2

第1報告では、臼杵悠会員より、ヨルダン人女性による労働市場参加の決定要因について、世帯調査から得られたマイクロデータに基づき分析が行われた。本報告では、教育水準が最も重要な決定要因であり、また、婚姻状態、特に大卒以上と未婚者が労

働市場への参加に影響を与えることが示された。参加者からは、未婚者の労働参加率が低い理由、既婚者の民間部門での就業状況に関する質問が寄せられた。

第2報告では、ハシャン・アンマール会員から、イスラーム世界での仮想通貨導入の可能性が検討された。本報告では、仮想通貨導入における問題として、国家がその価値を管理できないことによる問題、貨幣としての機能に関する問題、仮想通貨が投機の対象となることによるイスラーム法的な問題等が指摘された。そして、現在、これら問題の是非について、イスラーム法的な枠組みの中で積極的に議論を行う「法学的経済論」が展開されていることが示された。参加者からは、仮想通貨価値の管理手法、仮想通貨の導入をめぐる地域的な差異に関する質問が出された。

第3報告では、足立真理会員より、インドネシアにおけるザカート制度の実態について分析が行われた。インドネシアでは、官民多くのザカート団体が設立されたが、官民が協働してザカート管理を行う東ジャワ州・マラン市の事例が取り上げられた。そして、官民協働によるザカート管理は行政による社会福祉のアウトソーシングまたは準市場化と捉えることができることが示された。参加者からは、公務員からのザカート徴収、ザカート受給者の実態等について質問が寄せられた。

第4報告では、桐原翠会員より、マレーシアにおけるハラール認証制度について分析がなされた。本報告では、マレーシアのハラール認証規準は、イスラーム法規定とマレーシア政府による行政規則からなる複合的な認証制度と位置づけられ、地域的にも独自性があることが示された。参加者からは、シャーフイー派以外のイスラーム法規定が適用されるケース、日本におけるハラール認証との関係性について質問が寄せられた。
(上山 一)

第7部会 MR7-3

清水学氏の発表は、インドにおける現モディ政権について、主としてその対ムスリム認識やムスリムに対する施策について考察したものであった。とりわけ、現在の政策が採られるに至った背景が、その世俗主義の在り方の変化も含めて、明快に説明されていた。ガンディーに対する評価見直しの動きや、アメリカ合衆国トランプ政権とのシンクロなどについても、グローバルな視点から議論がなされた。

小山友氏の発表では、オランダにおけるトルコ系移民の政治活動について、トルコ系議員によって創設された政党 DENK の台頭、およびトルコ系オランダ住民とトルコ共和国との紐帯などが検討された。詳細な資料が検討されており、トルコ共和国内の特定地域との関連が村レベルまであぶりだされていたことに驚きを禁じ得なかった。従来、移民社会学によって研究されがちなテーマを、政治学で扱っている点も興味深く、今後の展開がますます期待される。

青木健太氏の発表は、アフガニスタンの現代政治の現況と構図をしっかりと示したものであった。また、現存する法律の瑕疵によって、大統領権力に対する抑制が利かない現状の問題点も指摘された。先行研究の整理は緻密であり、現地での勤務経験も生かされていると感じられた。理論的検討と政治状況分析の双方向から、今後さらに研究が進められていくことを予感させる発表であった。

全般として、集会最後の時間帯ではあったが、帰途につく必要もなく、例年に比べて多くの参加者が残った。これもオンライン開催による功罪の、功の側面と思われる。
(大稔哲也)

第8部会 MR8-2

MR8-2 会場は、モロッコを対象とした、イスラーム思想（スーフィズム）、歴史学（リーフ戦争）、人類学（公共文化論）に関わる発表で構成されていた。

棚橋氏は、15世紀のモロッコで活躍し、Dalā' il al-Khayrātの著者として、また多くのタリーカに影響を与えたスーフィーとして知られるムハンマド・イブン・スライマン・ジャズーリーのイスラーム思想について、研究成果を発表した。棚橋氏は、先行研究がジャズーリー教団を「異端的・反体制的」とみなしたり、シーア派的側面やポルトガルに対するジハードの提唱を強調したりするものであったことをまず明らかにした。そのうえで、ジャズーリー自身の著作の詳細な検討により、それらの先行研究の理解とは異なり、ジャズーリーはアシュアリー神学に依拠した神学思想を有すること、ジハードよりもイスラームの退廃を問題視し、基礎的なイスラーム教育の普及に尽力していたと捉えられることを提示した。限られた時間の中で先行研究の内容を的確にまとめつつ、原点の詳細な検討結果を通じてそれらの問題点を明確に提示した発表であり、質問者からもその研究の重要性が評価をされるものであった。

関佳奈子氏は、リーフ戦争（1921-1926年）再考に向けて、20世紀初頭のモロッコ北部における諸部族の動向を把握することを主眼とした発表をした。主史料として用いられたのは、モロッコを代表する歴史家として名高いムハンマド・ダーウードの手になる『テトワン史』や、モロッコの独立運動の担い手として名高いムハンマド・ワッザーニーの手になる独立運動史の中に収められたマフザン（モロッコの伝統的中央政府）からリーフの部族長に宛てた書簡である。関氏は、それらの分析から、諸部族とスペイン植民地行政府の関係が不安定化していたことと、スペイン植民地行政府と部族の間に立って両者の関係を仲介しようとしたマフザンの役割の重要性を指摘した。発表は、スペイン植民地行政府、部族、マフザンの関係を浮かび上がらせることに主眼を置いたもので、今後のさらなる展開が期待される堅実なものであった。

山口匠氏の発表（PDF発表）は、2000年代以降のモロッコにおいて、多文化主義を重視した政策へのシフトが趨勢として認められるのにも関わらず、地域伝統の継承・維持・保存、さらには文化遺産の創出と密接に関わる博物館が改革の対象とされていないという現状をまず捉えたものである。このような状況下においては、地域文化の維持、継承、さらには創造にとって、政策から離れた次元で展開し、大きな社会的潮流となっている市民的アソシエーションの活動が重要な意味を持つてくる。山口氏は、その流れ汲んだ現地のNGO団体を事例として取り上げて、NGO団体関係者たちが、王権を中心としたナショナルな文化表象とは一線を画する独自の文化表象のあり方や新たなナショナルな想像力のあり方を希求する試みを捉えた。山口氏の発表は、今日のモロッコにおいて進行している公共文化をめぐる草の根の動きを活写した貴重な発表である。
(齋藤 剛)

第8部会 MR8-3

MR-8 会場午後の部は歴史学に関する三つの報告が行われた。渡部良子会員の報告は、イラン北西部アルダビールにあるシャイフ・サフィー廟のサファヴィー朝期の財産管理に関するものであった。主にサフィー廟の不動産目録(Sarīh al-Melk)の欄外書き込みから情報を抽出した精緻な研究になる予定のものであったが、時間が不足して本論にあまり踏み込めなかったのが残念であった。一方で、不動産目録のみでは、財産管理の実態を明らかにする上で限界があることが計らずも示された。

後藤敦子会員の報告は、セルジューク朝末期の宰相職に関する意欲的なものであった。発表開始時に PC トラブルに見舞われたが、イラン西部のダルガズィーニ一家出身の5人の宰相のキャリアパターンを示すことで、イラン系官僚の典型例として知られるニザーム・アル＝ムルクー族との相違が示された。近年刊行された史料もあることから、今後の研究の進展に期待したい。

岩田和馬会員は、18世紀のイスタンブルの船着場の利用について報告した。背負子荷役組合、馬方荷役組合、船子組合などの組合がもっていた利用権はどのような性格のものであったのか、また、利用権をめぐるどのような争いが起こったのかが明らかとなった。空間の利用が、所有や賃貸と異なった排他的利用権として認められており、他集団との関わりがなかで縄張りとして決定されているというのは、法制史的にも重要な指摘である。以上の3報告は、いずれも、原史料に基づく質の高い研究であり、今後のさらなる発展が期待される。(近藤信彰)

【第36回年次大会特別研究集会を終えて】

日本中東学会としては年次大会の研究発表の部を初めてオンラインで開催し、いくつかの課題を残したものの、大過なく終えることができた。改めて、新しい事柄に取り組むための会員の集合的な潜在能力の高さを認識できて嬉しく思うとともに、関係諸氏に深く御礼を申し上げたい。

オープニング・セッションでも述べたが、デジタルな場で8部会19セッションという規模の研究集会／会議を開催できたという経験知は、この学会が将来、かなりの規模の国際会議を開催するための礎となりうると考えている。日本における中東研究は、中東へも、欧米へも、ばかにならない旅費を払わないと往復できないという地理的な条件を抱えているが、今後ITの活用によりその地理的条件を克服し、また、ヴィザなどの問題に頭を悩ませることなく国際会議に識者を招待する道につながるともいえるだろう。

特別研究集会をオンラインで開催すると決定した経緯、反省点などについて、手元のメモなどをもとにこの場をかりて報告しておきたい。(記憶違いがあるかもしれないが、それは平にご容赦を。)

【特別研究集会開催決定の経緯】

第36回年次大会は、5月16-17日に桜美林大学で開催する準備が加藤朗委員長・鷹木恵子実行委員を中心に進められ、3月にはプログラムや要旨集の準備が終わってい

た。しかし感染症の拡大を懸念し会員の健康を第一に考えなくてはいけないということで、まずは懇親会の中止を決め、さらに3月26日に大会開催に関係する実行委員と理事数名で会合をもち、9月に延期する案も検討された。

それからほどなくして、桜美林大学の教室使用が非常に難しくなったとの報がもたらされ、4月3日には大会中止をメーリングリストで通知、年次総会、公開シンポジウム、研究発表は個別になんらかの代替措置で行う方針へと転換した。総会は事務局が主管して開催、公開シンポジウムについては鷹木委員のあずかりとなり、研究発表をなんとか実現するにはどうしたらよいか、たまたま年次大会担当理事であったために、大稔会長の強い要請を断り切れず、対応策の取りまとめ役となった。若手の研究者に、「学会発表」の経験を積み、博士論文執筆や就職のためにプラスとなる機会を失わせないようにしたい、というのが会長と理事たちの願いであった。

この数年以内に年次大会の実行にかかわった理事、ウェブサイトの活用を見込んでの関係者、ということで、岩崎えり奈氏、保坂修司氏と三沢伸生氏、学会ウェブサイトやメーリングリストにかかわってくれている Vanta 社の北爪秀紀氏、さらに桜美林大学での実行委員会から加藤朗氏・鷹木恵子氏・近藤信彰氏らに、委員となっていただき、会長と事務局長を加えた陣容で代替として何ができるかを話し合うこととなった。

2019年度に大雨のために急遽取りやめとなったオリエント学会の例、他学会の動向などの情報を持ち寄っているいろいろ検討したが、グループメールによる話し合いはなかなか結論が出ず、4月の終わりごろには、研究発表を予定していた会員から問い合わせも来るようになった。とりいそぎ5月1日に学会メーリングリストで研究発表の機会を用意している、ということのみ通知した。この間に委員たちもオンラインで授業や会議をする経験を積んだことで3月・4月に抱えていた懸念は弱まり、理事会にオンライン／ライブの研究会を行うことにしたいと上申することが決まったのは、5月20日の Zoom ミーティングにおいてであった。多忙な委員がそろうのは21時からしがなく、夜の会議となった。

当時は夏になると感染症の罹患者も減るだろう、10月以降に肌寒くなると再度罹患者が増えるだろう、との見通しを持っており、9月に入るとさまざまな研究会や行事とのバッティングが危惧されるため、7月末～8月初旬に大学の授業期間が終わってから準備を進めて可能なぎりぎりの日程は8月最終の週末だろう、ということで8月29日・30日に開催するという案をまとめた。

6月8日のオンライン理事会は難しい案件が多くて5時間にもおよんだが、そのアジェンダの一つとして「第36回年次大会特別研究集会」を Zoom ミーティングとして9月29日・30日に開催すること、参加費無料とすること、が決定された。そして話し合いのための委員会はそのまま実行委員会へと横滑りした。多忙な要務の間を縫って頼りない座長の研究会運営につきあってくださった委員の方々の貢献に感謝したい。

Zoom への接続が難しい会員は PDF ファイルを掲示するかたちで発表できる、補完セッションの日（予備日）を9月6日に設ける、とデジタルディバイドを拡大しないような選択肢を用意した。2週間程度でできるだろうと思っていた発表者の意思確認

には、1 か月以上を要したが、大変ありがたいことに、プログラムに組み込まれていた発表者全員（海外在住者を含む）から、発表をするという返答をもらうことができた。

（委員会では、発表を見送る会員がでて「歯抜け」のようなプログラムになるかもしれない、と心配されていた。）

【反省点と課題】

なんといっても、準備時間が十分にとれず、いつもショートノーティスで発表者や運営関係者に通知をし、無理を言ってばかりだったことを申し訳なく思っている。1 か月あれば準備ができるだろうと8月に入って準備を本格化させたのだが、うかつにも、8月15日のリハーサルまでに、ポータルサイトの構造や利用の仕方、Zoom ミーティングの開催方法、各セッションの運営手順、などが周知されていなくてはいけない、ということを見落とししていた。それぞれの本務校での仕事や研究に忙しい方々に、押っ取り刀でのセッションの司会を引き受けてもらい、司会補助として2名のボランティアと14名の学生アルバイトを、理事や関係者が声をかけてくれて配置することができたのは、かなりぎりぎりのところだった。

リハーサル前に設定したセッションごとのグループグループが機能せず、リハーサル当日には、司会（Zoom でいうホスト）交代の手続きのためか、午後のセッションではミーティングルームに入れない人が相次ぎ、ホストの設定の見直しが求められた。

（とはいえ、リハーサルをやって問題点が明らかになってよかった、というのが大方の評価である。）

研究報告の機密性が情報流出によって損なわれないようにすること、他方で気楽にアクセス可能とすることで研究報告がより広く共有されること、の相矛盾する要請は、アクセスのための認証や公開時間、ダウンロードの可否をどのように設定するか、という問いとなってさまざまな場面で実行委員を悩ませた。また、筆者の生来の不注意な性格や老眼による細かい文字の識別困難が、ミスタイプを多く誘発し、メールをきちんと届けられなかったり、ポータルサイトに掲載されている情報のミスを見逃したりする例を少なからず生じさせた。個人的には仕事の何割かが「ミスタイプとの闘い」であったように感じている。画面に表示される文字が情報のすべてであるため、ミスがあっても顔を合わせて話していれば自然に了解される、ということがないのである。北爪氏が、実行委員の間では茫漠としたイメージしかなかったポータルサイトのプランを具体的なかたちで見せてくれ、さらに夜に日を継いだ細かい変更のお願いにも丁寧に対応してくれてとてもありがたかったが、一般名詞であるかのような「ミーティング」「セッション」「回答」などの語が、Zoom による特別研究集会ではそれぞれ具体的に何を指すかを、逐一定義する必要もあった。

参加費無料にした意義は参加促進のために小さくなかったと評価できるだろうが、もっと予算があればできたこと、楽になったと思われることもある。印刷費や会場の賃貸料がかからないから、Zoom 有料契約をしても例年の年次大会予算に10万円上乗せすればまかなえる、と試算したのだが、実際にはポータルサイトにさらに費用をかけて細かい設定をできた方がよかったし、実行委員会における事務補助のアルバイト費もあれば負担軽減になっただろう。1 か月馬車馬のように働かざるを得なかったよ

うに感じたが、送信済メールボックスにある関係メールは300件強で、企業の営業マンに比べてとりわけ多いわけではないとわかり、少し複雑な気分である。

最後に、オンラインはどこまでも「線」としてのつながりで、リアルタイムの双方向性はあるのだが、それを新たな人との出会いや旧交を温める場、新しい知見にふれるワクワク感の共有という「面」に展開するには、さらなる工夫が必要であると思った。今後、チャットやブレイクアウトセッション、控室の設定などによって、より充実感をもたらすようなミーティングが開催されることを期待したい。

(特別研究集会実行委員会 山岸智子)

【大会決算】

第36回年次大会特別研究集会決算報告

費目		収入	支出	
大会開催費	学会本会計から	400,000		
	年次大会特別基金から	100,000		
大会参加費等		63,000		
利子		2		
Zoom費用			28,781	
ウェブサイト製作費			200,000	
謝金	ウェブサイト関連		241,500	
	学生アルバイト		120,000	
大会参加費等返金			63,000	
振込手数料			20,570	
ウェブサイト手数料(銀行口座)			26,400	
雑費(ゴム印)			1,344	
合計		563,002	701,595	▼138,593

第26回公開講演会報告

日本中東学会第26回公開講演会「人類共生と宗教」

日時：2020年11月14日(土) 13:00~16:45

開催場所：Virtual OBIRIN 講堂

司会 後藤絵美(東京大学)

第1部 人類共生とさまざまな宗教

13:00~13:05 開会挨拶

森山央朗(同志社大学)

13:05~13:10 趣旨説明

加藤 朗(桜美林大学)

13:10~13:30 愛と共生のイスラーム

東長 靖(京都大学)

13:30~13:50 マイノリティとしてのユダヤ人の過去・現在・未来 市川 裕

(元東京大学)

13:50～14:10 贖罪論の克服から共生へ 山口里子（元日本フェミニスト神学
宣教センター）

14:10～14:30 周辺から見る現代日本仏教 川橋範子（国際日本文化研究セン
ター）

14:30～14:40 <休 憩> 桜美林大学学生有志による讃美歌のリモート合唱

第2部 人類共生に向けた実践

14:40～15:00 サンティアゴ巡礼と食と人間の安全保障 桃井和馬（桜美林大学）

15:00～15:20 大塚モスクと東洋大学の交流：地域の一員として
子島 進（東洋大学）

15:20～15:40 大久保の生活者の「心の支え」 山本重幸（共住懇）

15:40～16:00 新大久保における韓流と多国籍会議メンバーの様々な宗教
鄭宰旭（新宿韓国商人連合会）

16:00～16:35 質疑応答と討論

16:35～16:45 閉会の辞 大稔哲也 日本中東学会会長（早稲田大学）

日本中東学会第26回公開講演会「人類共生と宗教」は、もともとは2020年5月16日（土）17日（日）に桜美林大学新宿キャンパスにおいて開催予定であった日本中東学会第36回年次大会の初日の公開シンポジウムとして企画されたものであった。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、年次大会が中止となり、2日目の研究発表に関しては特別研究集会として8月末にオンライン開催となったが、初日のこのイベントに関しては、その後、本学会の例年の公開講演会を兼ねるかたちで、11月に開催されることとなった。

「人類共生と宗教」というテーマは、本来の開催予定日の5月16日が「国連国際人類平和共存デー」であったことと、また開催会場がある新宿・新大久保界隈は「多文化共生の町」として知られ、通称「イスラーム通り」と呼ばれる商店街などもあることから、それらを勘案して考案されたものであった。

公開講演会の第1部「人類共生とさまざまな宗教」では、イスラーム、ユダヤ教、キリスト教、仏教との関連から人類共生について、その専門家の方々からご講演を頂いた。最初に東長靖会員が、イスラームの理念と実践における共生として、クルアーンの記述やズィンマ制、またスーフイズムにおける愛のイスラーム運動について講演された。続いて市川裕氏がマイノリティとしてのユダヤ人の歴史を通観しつつ、中世イスラーム世界でのユダヤ人の繁栄と近世以降の西欧の繁栄と覇権下での彼らの厳しい状況を対比しつつ、イスラエルを含む現代主権国家とその市民に求められるマイノリティへの配慮について強調された。次の山口里子氏と川橋範子氏はともにフェミニスト研究者として、まず山口氏はフェミニスト神学の立場から、キリスト教の贖罪論が「歴史のイエス」のいのちを尊重した生き方とは正反対に、「犠牲の論理」や「殉教」

を聖化し、さらに戦争正当化にも繋がったことを指摘し、その克服に向けて講演された。川橋氏はSDGsの「誰ひとりとして取り残さない」という理念と仏教の「慈悲」とに親和性があるとする主張の一方で、仏教界における女性当事者軽視の現状を鋭く指摘し、批判的に内省する講演をされた。

前半の諸宗教の思想や歴史また批判的検討も含めた議論を踏まえて、後半の第2部「人類共生に向けた実践」においては、実際の現場での共生に向けた活動の取り組みについて実践家たちからご講演を頂いた。まず桃井和馬氏は桜美林大学の学生らとのサンティアゴ巡礼で体験した、スペイン地元の人々による巡礼者たちへの食や安全を保障するボランティア活動の実践について講演された。子島進会員も本務校の東洋大学の学生たちとその地域の外国人の方々との多文化共生に向けた実践事例として、特に大塚モスクとの交流活動について話され、そこからの発見について講演をされた。山本重幸氏と鄭幸旭氏は、ともに新宿・新大久保地域の地元での多文化共生に向けたこれまでの長い実践経験に基づき、山本氏は市民活動団体「共住懇」の立ち上げの経緯、活動の理念、そして生活者の「心の支え」について講演された。鄭氏は、新大久保での韓流ブームの変遷と市民組織「多国籍会議」のメンバーたちの多様な宗教と文化について、その相互理解に向けた数々の取り組みについてご講演下さった。

以上のように前半の教義・思想・歴史的現状についての講演と後半の具体的実践例についての講演とが相互に補充し合い、「人類共生と宗教」というテーマを深く掘り下げる興味深い充実した講演会となった。参加者は途中での出入りもあったが70名程度で、九州からの参加者もみられ、オンライン開催ならではの意義も感じられた。

なお、今回の講演会の登壇者の方々には、最初の依頼から講演会当日まで1年以上もお待たせすることとなったが、全ての登壇者にそのままご講演頂けたことに、まずは深く感謝を申し上げたい。また例年の公開講演会を兼ねて開催されることとなってからは、公開講演会担当の森山央朗理事と末近浩太理事にもご協力を頂き、さらに講演会開催準備過程と当日の会運営に関しては、後藤絵美会員の司会担当をはじめ、第36回年次大会実行委員会の全てのメンバーの方々大変お世話になった。ここにあらためて記して厚く御礼を申し上げたい。

(元第36回年次大会実行委員会委員長 加藤朗、同事務局長 鷹木恵子)

第37回年次大会の開催について

2021年度の日本中東学会年次大会は、立命館大学を開催予定地としておりましたが、新型コロナウイルスの影響により、オンライン開催となることが決定いたしました。

大会の実施要項と研究発表の応募要項が下記のとおり決定しましたのでお知らせいたします。例年どおり、大会の1日目が公開企画、2日目が研究発表（企画セッション含む）になります。どうぞよろしくご参集くださいますようお願い申し上げます。

なお、総会の開催につきましては、追ってお知らせいたします。

開催日時：2021年5月15日（土）・16日（日）

開催形態（1日目）：公開講演会（オンライン配信、調整中）

開催場所（2日目）：研究発表・企画セッション（Zoomなどを使用）

【実行委員会】

委員長：末近浩太

事務局長：黒田彩加

委員：鳥山純子、馬場多聞、小杉泰、ハシヤン・アンマール、吉川卓郎、東長靖、長岡慎介、帯谷知可、イディリス・ダニシマズ、佐藤麻理絵、森山央朗、佐野東生

応募要項は以下のとおりです。発表をお考えの方は、どうぞふるってご応募ください。

研究発表・企画セッションともに、応募の締め切りは、1月8日（金）とさせていただきます。

応募先メールアドレスは、第37回年次大会実行委員会 [james2021ritsumeij\[at\]gmail.com](mailto:james2021ritsumeij[at]gmail.com) です。[at]は@に読み直して下さい（以下、同じ）。

※応募された方には、年次大会実行委員会から1週間以内に受信確認のメールを差し上げます。受信確認メールが届かない場合は、実行委員会・黒田の以下のメールアドレス宛に必ずご一報ください。

[a-kuroda\[at\]fc.ritsumeij.ac.jp](mailto:a-kuroda[at]fc.ritsumeij.ac.jp)

1. 研究発表

研究発表はビデオ会議ツールであるZoomなどを用いて行います。発表を希望される方は、1月8日（金）までに年次大会実行委員会までメールにてご応募ください。その際、下記の諸点についてお知らせください。

①氏名：漢字もしくはカタカナ表記

②氏名のローマ字表記

③所属：大学院生の場合はその旨を明記

④連絡先メールアドレス

⑤発表タイトル（仮題も可）

⑥発表内容の概要：日本語400字程度／英語200words程度。日本語か英語のいずれかで結構です。テーマと内容が明快にわかるように記してください。正式の「要旨」につきましては、実行委員会での採否の決定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります。発表の言語は、原則として、日本語か英語のいずれかとします。それ以外の言語での発表をご希望の方は、実行委員会事務局までお問い合わせ

わせください。

⑧発表者は日本中東学会年会費(2020年度分)を納入済みであることが条件となります。その点を確認の上、「納入済み」と記してください。

2. 企画セッション

第37回年次大会では、会員による企画セッションも募集します（Zoomなどを使用）。特定のテーマに関する企画セッションの開催をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。

一つの企画セッションの持ち時間は、発表・コメント・質疑応答を含め1時間30分とし、発表者は3名程度とします。コメンテーター（討論者）をつけるかどうかは自由ですが、必ず1名の司会者が必要です。企画責任者・発表者・司会者はすべて日本中東学会会員であることとします。また、企画責任者は、発表者・司会者・コメンテーターのいずれかを必ず兼ねることとします。企画責任者が、発表者と司会者、あるいは、司会者とコメンテーターの二役を兼ねることもできます。なお、コメンテーターは非会員でも構いません。

企画責任者は、1月8日（金）までに年次大会実行委員会までメールにてご応募ください。

その際、下記の諸点についてお知らせください。

- ①企画責任者氏名：漢字もしくはカナカナ表記とローマ字表記の双方
- ②企画責任者の所属
- ③企画責任者の連絡先メールアドレス
- ④使用言語：原則として、日本語か英語のいずれか。それ以外の言語をご希望の場合は、実行委員会事務局までご相談ください。
- ⑤企画セッションのタイトル
- ⑥企画セッションの主旨：日本語400字程度／英語200words程度。日本語か英語いずれかで結構です。
- ⑦参加者一覧：各参加者氏名の漢字もしくはカタカナ表記とローマ字表記の双方、所属、セッションでの役割。司会とコメンテーターは応募時点では未確定でも構いません。
- ⑧各発表者の発表要旨：⑥の企画セッションの主旨と同様の分量・要領
- ⑩企画責任者は日本中東学会年会費(2020年度分)を納入済みであることが条件となっています。その点を確認の上、「納入済み」と記してください。

3. 託児サービスについて

第37回大会では、大会開催期間中の託児サービスの利用に対して、費用の補助を検討しております。詳細につきましては、追ってお知らせいたします。

以上、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

連絡先：

日本中東学会第 37 回年次大会実行委員会事務局

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150

立命館大学 立命館・アジア日本研究機構 黒田研究室

E-mail : james2021ritsumeij[at]gmail.com

『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告

1. 『日本中東学会年報(AJAMES)』の刊行・投稿について

ただいま、36-2 号の編集を行っております。英語特集 (研究ノート 4 本)、研究ノート 2 本、博士論文要旨 1 本を掲載予定です。来年、2 月には刊行の予定です。37-1 号の投稿締め切りは、12 月 1 日でした。多くの投稿をいただき、ありがとうございました。現在、原稿の審査を行っております。37-2 号の投稿締め切りは来年 6 月 1 日です。欧文の特集を含め、皆様の御投稿をお待ち申し上げます。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

明治大学情報コミュニケーション学部 横田貴之気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@james1985.org

2. 『日本中東学会年報(AJAMES)』投稿規定等の改正

『日本中東学会年報』投稿規定、および Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES) Guidelines for Contributors につき、次の通り改正しました (2020 年 10 月 15 日 日本中東学会理事会承認)。

(1) 『日本中東学会年報』投稿規定の改正

(旧)

10. 非学会員の投稿

10.2) 投稿原稿の掲載決定後、直ちに掲載料として 5,000 円を日本中東学会に支払っていただきます。

(投稿原稿が不採用となった場合は、この限りではありません。)

10. Manuscript Submissions by Non-Members

10.2) Authors must pay a publishing fee of 5,000 JPY to the JAMES as soon as their manuscript is accepted for publication. (No fee will be charged if the manuscript is not accepted for publication.)

(新)

10. 非学会員の投稿

10.2) 投稿原稿の掲載決定後、直ちに掲載料として、原稿 1 本につき 5,000 円を日本中東学会に支払っていただきます。

(投稿原稿が不採用となった場合は、この限りではありません。)

10. Manuscript Submissions by Non-Members

10.2) Authors must pay a publishing fee of 5,000 JPY per manuscript to the JAMES as soon as their manuscript is accepted for publication. (No fee will be charged if the manuscript is not accepted for publication.)

(2) Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES) Guidelines for Contributors の改正

(旧)

6. Format

6.4) Transcriptions of Arabic or Persian to Latin alphabets are at the author's discretion, and he/she should ensure that they adhere to international standards such as those accepted by various encyclopedias and the International Journal of Middle East Studies (IJMES).

(新)

6. Format

6.4) Transcriptions of Arabic or Persian to Latin alphabets are at the author's discretion, and he/she should ensure that they adhere to international standards such as those accepted by various encyclopedias and the International Journal of Middle East Studies (IJMES). The transcription method must be consistent throughout each manuscript.

(横田貴之 AJAMES 編集委員長)

寄贈図書

【単行本】

鈴木 慶孝『〈トルコ国民〉とは何か:民主化の矛盾とナショナル・アイデンティティー』

慶應義塾大学出版会 2020年9月

末近浩太 『中東政治入門(ちくま新書 新書)』筑摩書房 2020年9月

八木久美子 『神の嘉する結婚 イスラムの規範と現代社会 pieria books』東京外国語大学出版会 2020年7月

石田裕了 『中東を丸かじりするー政治構造の基底にある本質・要因を探るー』宮帯出版社(MYOBJ) 2020年9月

森戸幸次 『パレスチナ人とイスラエルー中東百年戦争の解を求めて』第三書館 2020年6月

中村寛(監修),浜中新吾(編集) 『イスラエル・パレスチナ (シリーズ・中東政治研究の最前線 3)』ミネルヴァ書房 2020年9月

日本サウディアラビア協会 『私の人生を変えた日本留学 -サウジアラビア人元留学生

の言葉

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

関西アラブ研究会『アラブ・イスラム研究』第18号 2020年8月

日本サウディアラビア協会『日本サウディアラビア協会報 sadaqah』No.241 2020年9月

日本アラブ協会『アラブ 夏号 ー特集 新型コロナと中東ー』第172号 2020年7月

日本アラブ協会『アラブ 秋号 ー特集 湾岸危機30年ー』第173号 2020年10月

会員の異動

【新入会員】

本間 流星	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
ガーダ・サイド	東京大学
辻 大地	九州大学大学院人文科学府
伊藤 匠平	東京大学大学院総合文化研究科
三橋 咲歩	早稲田大学
Teeba M. Abdulati	東京外国語大学
Hussein Khaldoun	東京外国語大学
平野 あんり	上智大学
Moussa Mohammed	Istanbul Sabahattin Zaim University
Layla Saleh	Qatar University
Larbi Sadiki	Qatar University

【年会費長期滞納中の会員の皆様へ】

日本中東学会細則 I-3 に定めるところにしたがい、長期滞納者（昨年度分から遡り3年間以上年会費を滞納中の会員。今年度の場合2017～2019年度分、あるいはそれ以上の年会費を滞納中の会員）は、理事会による承認を経た後に退会（会員資格を喪失）となります。長期滞納者に該当する会員の皆様には、会員窓口（国際文献社）より個別にメール・文書等によりその旨お知らせしておりますので、すみやかな年会費の納入を宜しくお願い申し上げます。（安田慎 事務局長）

事務局より

6月の総会で事務局業務の一部外部委託化が可決され、2020年10月1日より（株）国際文献社に「会員情報、会費納入状況、選挙」の管理を委託しています（事務局とのすみ分けのため、会員の皆様の会員情報の対応をするのが「会員窓口」とご理解ください。）。

所属・住所変更、入退会、会費納入状況の問い合わせなどは、国際文献社で管理す

る james-post@bunken.co.jp のメールアドレスにお送りください。

〒162-0801
東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター 国際文献社内
日本中東学会会員窓口
連絡先：james-post@bunken.co.jp

学会費の振込用紙もこの住所から発送されます。

皆様の利便性の向上につながるよう、事務局としても引き続き業務の改善を図っていく所存です。

(安田慎 事務局長)

編集後記

編集作業が遅れ、年末ギリギリの刊行になってしまい、申し訳ございませんでした。
(秋葉淳 ニュースレター担当理事)

日本中東学会ニュースレター 第156号
発行日 2020年12月24日
発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局
〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町1300
高崎経済大学 安田慎研究室
E-mail: james@james1985.org
<http://www.james1985.org/>
郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会)
ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096
(ニホンチュウトウガクカイ)